The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介と精神科学　一後期作品における〈怪異〉の表現をめぐって一
Author(s)	金, 香花
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87777
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名（　金　香花　）	
論文題名	**芥川龍之介と精神科学** ―後期作品における〈怪異〉の表現をめぐって―

論文内容の要旨

本論文は、分野を横断しつつ摂取した精神科学の知識が芥川龍之介の文学創作にどのように寄与しているのか、また芥川における精神科学の受容・影響関係の特徴とは如何なるものかを、作者の八篇の作品分析を通してその一端を示したものである。これから論じる八作は、芥川の精神科学受容の新しい側面を見出す上に貴重な材料となる小説「彼　第二」、「妙な話」、「たね子の憂鬱」、「死後」、「春の夜」、「海のほとり」、「年末の一日」、「蜃気楼」である。いずれの作品には、芥川の精神科学的教養を窺わせるような要素が組み込まれており、また不思議で奇妙な心象風景が描かれているという共通点から、作者のつくり出す〈怪異〉の片鱗を覗かせるにも意義深い作品であるように考える。

大正期を代表する文豪・芥川龍之介は、短い生涯の間に怪奇性あふれる傑作を次々と生み出した。しかしながら、芥川の多くの怪奇幻想小説は、単なる神秘現象や作者の怪奇趣味によるものと見做され、未だに不可解のままのものが多い。例えば、本論の第一章から第五章で取り扱う作品も、従来議題として余り取り上げられなかった。芥川の「彼　第二」や「妙な話」、「たね子の憂鬱」、「春の夜」、「死後」の読解が停滞している理由は、これらの作品が作者の他の人気作品のように読みの多様性に富んでいないことが考えられる。

しかし、この作品群が持つ芸術的、文化的価値が希薄だというわけではなく、むしろそれに接近できるような適切なアプローチ方法が、従来の研究では見出せなかったからではないか。

本研究で論じる八篇は、芥川における精神科学の受容や影響を考察する上で、また作者の怪奇幻想小説を読み解き、また多角的に捉える上でも、非常に重要な意味を持つ作品群であるように考える。何故かと言いうと、これらの作品には、同時代の精神科学分野の知識が応用され、それぞれの作品の主題に繋がる怪奇性や奇妙さを増幅させているからだ。よって、これらの作品を一つ一つ分析していくことは、芥川の文学の新たな側面を発見することに繋がると考える。即ち作者の作り出した〈驚異〉や〈怪異〉は、単なる神秘現象でなく、科学的見地に基づいて織り成された産物であるという特徴を察知することができる。

序章では、精神科学の知見から見た芥川、及びその文学における精神科学の影響をめぐる先行研究を概観し、本研究の動機と意義について述べる。また、名著復刻版『湖南の扇』（一九七七）に収録された「彼　第二」や『文豪怪談選』シリーズ（全十五巻）の『芥川龍之介集』（二〇一〇、七）選定された「妙な話」、「春の夜」、「死後」の読解が停滞している理由から、芥川研究において、新しい着眼や研究視座が求められると問題提起をする。

第一章では、芥川の晩年の小説「彼　第二」の読解を試みる。妹さんからの手紙を機に、生前安住の地を見出せず、彷徨い続けていた〈彼〉との初対面の夢を見て「妙に」疲労感や不気味を感じる〈僕〉の内面を、その夢の生成から解釈する。「彼　第二」における夢は、現実と夢の境目が曖昧になっている〈僕〉の「病的な神経」が織り成した心象風景であり、その形成には精神分析や心理学など横断的領域の知識が受容されている。また、「これも亦或亡友のことであるから、「彼・第二」と云う題をつけたものである」と、本作品が私小説風の作品であることを暗示している作者の言説を手掛かりに、「彼　第二」に秘められた作者の思想変化や社会認識についても考察する。

第二章では、フロイトの提起した無意識的な心理的メカニズムの〈防衛機制〉の知識が援用された、小説「妙な話」を考察する。この作品は従来、赤帽にまつわる超常現象が描かれたものとして、謎に包まれていた。しかし、「妙な話」の根幹をなす奇妙さは、赤帽との遭遇だけの話に留まらず、千枝子夫婦ともにすぐ目の前に姿を現した赤帽の顔がどうしても覚えられないという不思議な現象も内包していることを主張し、従来解明されていなかった、これらの不思議な現象を解明する。

第三章で論じる小説「たね子の憂鬱」は、専業主婦たね子の心理状態を詳細に描いた作品で、そこには、彼女の抑圧されていた感情が不安や恐怖の感情へと止揚する過程が描かれている。不安や虚無の深淵へ落ちる、たね子の

心的状況、特に従来光が当てられなかった彼女の心境の変化や夢の問題をフロイトや森田正馬の理論を視野に入れつつ考察し、それによって、かつて「憂鬱」の一語では捨象されてしまう、たね子の不安心理の推移や機微を、形象化することができる。

第四章では、主にフロイトの夢理論を手掛かりとして読まれてきた、芥川の晩年の小説「死後」の読解を深める。本作は、精神分析学の始祖であるフロイトの提起した夢理論や無意識に触発されて描かれているものの、フロイトの夢学だけでは収斂しきれない側面がある。例えば「死後」には、無意識を顕在化させる夢の機能だけでなく、心身の不調を表す色彩夢も描かれている。また、作者の主眼は〈夢世界〉にのみならず、〈死後の世界〉にも置かれており、死後の〈僕〉を描き出すのに、何故夢を媒介にしたのか等の問題もまだ明らかにされていない。本稿では先行研究で十分に明らかにされていない、〈僕〉の〈夢世界〉と〈死後の世界〉の細部にもう一度焦点を当ててみる。

第五章で論じる小説「春の夜」は、芥川の怪異趣味を窺わせる作品であるが、従来議論の俎上に載せられなかった。怪異に彩られたＮさんの体験談を主軸とする本作は、未だに多くの謎に包まれている。作中において、Ｎさんに襲い、金をせびろうとした青年は、一体誰だったのか、そしてＮさんから不気味な話を聞いた書き手〈僕〉は、どうやって清太郎に好意を寄せていた彼女の心理を即座に見抜くことになったのか、という問題はまだ明らかにされていない。〈春の夜〉という物語の真相を解明する際に、生前芥川が深い関心を示していた精神分析や心霊学の知識を視野に入れる。

第六章では、芥川が主張した〈文学〉と〈科学〉の相関関係を、同時代の精神科学の影響が窺える作者の最後の短篇集『湖南の扇』から考察する。芥川は最晩年、評論「続文芸的な、余りに文芸的な」（一九二七）において「「芸術は科学の肉化したものである」と云うコクトオの言葉は中っている。もっとも僕の解釈によれば「科学の肉化したもの」と云う意味は「科学に肉をつけた」と云う意味ではない」と述べる。本章では、特に『湖南の扇』の収録作品である「海のほとり」の分析を中心に、フロイトの精神分析や同時代の心理学の知識が、芥川の晩年の作品の形成にどのように寄与したのか、その一端を示す。

第七章では、小説「年末の一日」が発表された当時の夢学や精神科学の知見に依拠し、従来とは異なる角度から「年末の一日」に光を当てる。従来、本作は〈死〉の気配が漂う作品、或いは人生の虚しさや死の不安からの脱出劇を描いた〈私小説〉として読まれてきた。しかし、「年末の一日」は死のイメージを散りばめていると捉えるより、むしろ墓参りを機に自らの精神の不健全な傾きに気づく〈僕〉の、感情の機微が描かれている作品ではないかと異議を唱える。

第八章では、小説「蜃気楼」が芥川の一番の自信作と称された一要因を探ってみる。本作が、〈詩的精神〉の浄化という作者の晩年の芸術観を、そつなく体現させたと捉える先行論を踏まえながら、「蜃気楼」に限って試みられた策略は、具体的にどのようなものかを検討したい。その際に、精神分析など精神科学の知識を参考にする。

結論では、芥川の作り出した〈驚異〉や〈怪異〉は、単なる神秘現象でなく、科学的見地に基づいて織り成された産物であるという結果を導き出す。これまでに、文学作品における精神科学の受容を論じる際、その研究対象となった大部分は、狂気をテーマにした作品、或いは狂気性が漂う作品であった。しかし、精神科学の中には、精神分析や心理学、精神医学、超心理学など様々な分野があり、人間の心や精神に生じる不具合も、必ず狂気に繋がるものとは限らない。従って、精神科学の受容をめぐる文学研究において、狂気をモチーフにした作品に限定する必然性はなく、むしろ〈驚異〉や〈怪異〉を成立させる心象の多様化に目を向けるべきであると結論付ける。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　金香花（JIN XIANGUHA）　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	飯倉　洋一
	副 査	大阪大学　教授	滝川　幸司
	副 査	大阪大学　准教授	鈴木　暁世
	副 査	大阪大学　准教授	渡邊　英理

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　芥川龍之介と精神科学
—後期作品における〈怪異〉の表現をめぐって—

学位申請者　金　香　花（JIN XIANGHUA）

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　飯 倉　洋 一
副査　大阪大学教授　滝 川　幸 司
副査　大阪大学准教授　鈴 木　暁 世
副査　大阪大学准教授　渡 邊　英 理

【論文内容の要旨】

本論文は、芥川龍之介における精神科学の知識が、芥川の文学創作にどのように関わるかを、八編の具体的な作品に即して考察したもので序論と八章の各論と結論から成る。序論では、とくに重要な一柳廣孝の『無意識という物語』をはじめとする先行研究を整理した上で、芥川における精神科学の影響をより広範にとらえることができると主張し、その根拠について概述する。第一章「芥川龍之介「彼　第二」論—〈僕〉の夢を軸として」では、「彼　第二」に用いられている夢知識が、大正時代の夢研究書『夢学』の内容を摂取した可能性について論じた。第二章「芥川龍之介「妙な話」論—夫婦間におけるテレパシー現象に着目して」では、千枝子夫婦がともに赤帽の顔を覚えられない現象を、ヒステリー性健忘ととらえ、芥川の防衛本能に関わる心理学やフロイトの精神分析学の知識が駆使されていると論じた。第三章「芥川龍之介「たね子の憂鬱」論—揺れ動く不安心理の行方」では、たね子の内面や夢に着目し、芥川が影響を受けていたとみられるフロイト理論や森田正馬の精神医学を参考に作品を読み解いた。第四章「芥川龍之介「死後」試論—夢中の〈僕〉をめぐって」では、死後の自分が心と感情をもって妻や友人の前に姿を現す夢について、メーテルリンクの『生と死』の理論を使った可能性を論じた。第五章「芥川龍之介「春の夜」の一考察—怪異の正体を見抜く〈僕〉の合理的思考をめぐって—」では、Ｎさんの不思議な体験談と、その体験談を聞いた〈僕〉が即座に彼女の本心を言い当てたことに焦点をあて、本作発表と同時代の心霊学研究書を参考に、作品を読解した。第六章「芥川龍之介の短編集『湖南の扇』に見る精神科学の影響—『海のほとり』を中心に—」では、芥川が主張した〈文学〉と〈科学〉の相関関係を、同時代の精神科学の影響が窺える作者の最後の短編集『湖南の扇』から考察、その中の収録作品である「海のほとり」を中心にフロイトの精神分析や同時代の心理学の知識が、芥川の晩年の作品形成にどう寄与したかを検討した。第七章「芥川龍之介「年末の一日」に見る精神科学の影響—〈夢〉〈忘却〉から探る〈僕〉の深層心理」では、〈死〉の気配が漂う作品、あるいは死の不安からの脱出劇を描いた〈私小説〉という従来の読み方に異議をとなえ、発表当時の夢学や精神科学の知見に依拠し、墓参りを機に自らの精神の不健全さに気づく〈僕〉の、感情の機微が描かれている作品という見方を示した。第八章「芥川龍之介「蜃気楼」における〈不気味なもの〉への一考察」では、絶えず不気味な感じに襲われ

る〈僕〉の心の機微を、精神分析の無意識の思考理論を意識しながら細やかに表現した可能性が高いことを論じた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、「精神病理と芥川」というテーマでの従来の研究をふまえつつも、芥川自身の言説や、当時の精神科学や心霊学の流行、芥川のノート類の調査などに基づき、芥川の精神科学の知識が、作品に色濃く反映しているとして、新たな作品読解の可能性を提示したものである。

申請者は、芥川の言説や、同時代の精神科学や心霊学の文献、芥川が影響を受けたと思われるフロイトの精神分析学などを丹念に読み込み、各章の作品論に組み入れている。『夢学』など、同時代に読まれたものではあるが芥川が確実に読んだとは立証されない文献を用いて作品解釈を行っていくことは、有効性にやや疑問を感じざるをえないとはいえ、各論が相互に補う効果もあって、全体としては、このテーマにおける一定の成果をあげたと評価できる。怪異的短編といえる「妙な話」は、芥川が新しい怪異小説の書き方として心霊学的な知見を取り入れたという第二章の見解、また第七章の「年末の一日」論で見せた精神分析学的方法を用いた読み解きは、それなりの説得力をもつものである。しかし芥川自身の精神科学の知見が反映されたものだと言うには、さらなる補助線を要するだろう。

上述の例に見られるように、芥川の精神科学や心霊学の知見と作品を緊密に結びつけるという点に関しては、十全にそれが達成されたとは言いがたい。精神科学や心霊学に基づいて作品が分析できることで、芥川がそのような知見に基づいて作品を創作したと言うにはやや飛躍があり、その橋渡しとして何らかの実証的、論理的な手続きが必要であった。たとえば旧蔵書やノート類の調査をせっかく行いながら、それが十分に生かしきれていなかったことは惜しまれる。本論文所収の作品論は、多くは仮説の域にとどまっており、その仮説が作品解釈の大きな転換点になるという魅力もさほど感じられなかった。

とはいえ、芥川の晩年の諸作品を、「狂気」や「病的な精神的世界」と評する一般的な傾向に対して、別の角度から分析する有力な可能性を示したという点で、芥川研究を一歩進めたという評価はできる。よって、本論文を博士（文学）に相応しいものとして認定する。